

いわゆる「除霊」と「浄霊」に潜む危険性

「除霊」や「浄霊」という言葉が用いられることがある。前者は、ある霊が人間に憑依して不幸や不運をもたらすことであり、そうした状態にあることが判った以上、そのままにしてはおきたくはないであろう。そこで憑依した霊を取り除くことが可能であれば、いわゆる「除霊」することは当然のことということになる。

後者については、除霊とほぼ同様の意味をもつが、憑依した霊の不浄な部分を浄化させるという意味もあるようである。憑依した霊に対して、その対応の仕方を聞くと「成る程」と思われる。さらにその必要性を説得されれば、普通の人たちであれば、一刻も早く浄めてもらいたいと思うことであろう。

しかし、その期待通りに除霊され、浄霊されるのであろうか。現実には、個人的霊媒も含め関係者たちは、「間違いなく除きました」「浄霊しました」と言うであろうし、儀式的作法などからも素人は納得させられるようである。

しかし、これに一度疑問を抱くようになると、満足した解決を与えてくれるものは、一体何かということになり、さらに進んで、科学的態度をそこに求めるとなると、もはや心霊科学以外にはないというわけである。

除霊

除霊とは、上に述べたとおり、取り憑いたある霊を人体から除くという意味であり、一般の人としては、これにどういう印象をもたれていることであろう。

もちろん、彼らは客観的霊魂を認めないと言いながら、心中は認めている人たちも多いようである。おそらく、「今日の学問が認めていない」からということで否定しているところがあると思う。しかし、今日の学問にはまだまだ「未知」なるものが多い。そして、「霊」に関するものもその一つであるが、世界的に転じてみると、霊魂を認めている国々の方が多いのである。しかも、人間は霊魂によって生命が与えられているという重要な事実を、すでに科学的に立証しているのである。わが国においては、文科省が恣意的であるか否かは不明であるが、これを認めていないため、それが多くの国民の理解を困難にさせている。しかし、事実は事実であり、人間は霊魂によって生命が与えられ、生存していることは否定しようがないのである。

「除霊」「浄霊」と口にする人たちについて

霊魂を認める人たちの、ことに近頃続出の宗教団体の人々の間で、ある時、ある場合、

この「除霊」という言葉が用いられている。彼らは、何か禍い事、ことに病気や生活上の悩み事など、不幸とか不運がつづく、それは「ある霊」の祟りであるから、その霊を除く為に、「浄める」のだと言う。しかし、その「霊なるもの」に対しての科学的根拠はなく、ただ、彼らの口から飛び出して来た、彼らの仲間だけに通用する常用語といえるものでしかないわけである。

同様の意味で「除霊」と口にする霊媒、およびその周辺者という存在もある、

何ととっても、対象となる霊魂は目には見えない。したがって「除霊しました」と言われたところで、それが本当のことなのか、デタラメなのか、まずはじめにその霊の身元すら明らかにさせなければならぬ。われわれ研究者の立場からは、その証明こそが霊の存在や発達の程度を見極めるためには絶対かせない重要な要素の一つだからである。ただ、外面的に除霊したと言ったとしても、その形から見ただけで、芝居か、あるいは霊的現象であっても、対象の霊（インチキ霊、低級霊、ものづき霊）による演出かも知れない。そこでその見極めができる信頼できる審神者の存在が欠かす事ができないわけで、これが除霊に際して大切な要件となっている。

これに対して、霊に関する知識の少ない、あるいは心霊常識のない人たちは、「単に除けばよい」くらいの気持ちで、すべてを言われるまを信用し、受け入れている。

しかし、実際に彼らの行っている行為が、条件を無視したものであるとすると、除霊なるものを受けた本人は明日から将来にわたって、かえってどんな不幸や危険をもたらされるのか、全く予想がつかなくなることになる。

霊の本質と除霊

このように、この「除霊」とか、「ある霊を除く」と口にする人々が、はたして100%、霊魂の本質というものを突き詰め、霊の本質を究めた上で、その知識によって述べているのであろうかという疑問が生じる。

もしも霊の本質に通せず、ただ漫然を「霊を除けば良い」「悪い霊だから」と、何でもかんでも除霊すべきである、という考え方であっても、あまりにも幼稚かつ単純であると言わざるをえない。一方、そこを狙って、教団づくりのうまい人たちは、その教団独特の「浄霊」とか「浄め」などを行うと公言している。一体「霊を浄める」ということは、そう単純なものではない。浄霊をしたといわれて、また元の木阿弥となった実例がいかにか多いかということからもわかる。

そうした単純で、かつ幼稚な人たちの中に宗教家が含まれている。また、そうした信仰にとらわれた多くの人々がいる。

しかも、この誤った考えの人々を仔細に調査してみると案外、「心霊家」といわれている人が結構多いことに驚かされる。

何と言っても、霊魂問題に関する限り、霊の本質を知り、しかも徹する事が全ての前提となることは言うまでもない。ことに、「除霊」に関連する広い心霊知識が必要であり、霊の本質に徹して下される判断でなければならない。

霊の本質を知ることということは、人間と霊魂との関係を知るところからはじまる。この取り組みこそが本質を知る上での原点である。

そこで、まず人間そのものについて<真の人間観>に基づくことが大切である。その一番よい勉強法は、過去に地上生活を経験したことがあり、その研究に今も携わっている霊界人（幽界人は不適）に訊くことである。その適任者の一人であるとされている霊界人マイヤースは「いかなる肉体も肉体以外のある物……魂……によって動かされる。肉体には自動的性能がない。魂が働けばこそ、肉体は内から動かされ、魂が存在すればこそ、肉体には生命がある」（『個人的存在の彼方』カミンス原著、浅野和三郎訳、心霊科学研究会、1938年）と述べている。これは血と肉と神経等により構成される肉体をもつ、生身の人間に対する正しい指導原理なのである。魂なるものの心が人間の心である。その「心」なしに「肉体」は動かない。ここに、その魂の正しい、これこそが霊魂の本質であることを知るべきである。さらに、霊魂には、いかようなる霊魂（自然霊にも）にも「向上性」がつきまとっているのである。わたしは、この霊の向上性を、永遠の生命をもっている人間の価値の原動力であると信じている。これについて、実際面から言えば、人生の意義であり、そこに人間の創造的再生が行われている所以でもあるといえよう。これに関して、生前のマイヤースは類魂説（グループ・ソウル）を強調し、なお引き続き、死後の世界からも、これが正しいことを通信してきている。

わたしは、この向上性こそが「霊の本質」をなすものであると確信している。もはや、この「向上性」が霊魂の本質であることを理解し、これに徹する以上は、何の意味もなく、ただ漫然と、除霊ということはできるはずのものではない。それを平然として、当然であるかのごとく、除霊、除霊をいう。このような職業霊媒が世間には多く存在する。それだけではなく、それを安易に口にする心霊家がいる。これ（除霊・浄霊）をもって信者集めの方策の一つにしている新興教団がある。

このような教団は、どのようなことを主張しているかというのと、その内容は、「心霊科学」の上に立ち、神霊主義的な理屈をいう。例えば、「人間は死後も霊魂で生き続けている。そこは幽界であり、その生活中に、地上生活時代に経験させられた恨み、憎しみ、願いごとなど、さまざまな執着のため、この幽界から脱出して現界に帰り、人の肉体に

憑く。それに加え、いろいろの悪霊たちもそうである。そして、それらのもろもろの霊たちに人間は操られているのである。わが教団では、これらの人間に取り憑いてるそれらの霊を、肉体から離したり、その霊力を弱めたり、浄めたりして、その本人の不幸や不運を除霊・浄霊で解消させる」という。

このように除霊・浄霊を行ってあげるというだけではなく、その術をわずか数日間の講習で伝授するという。その術は、神から授かっているものをもっているとか、いや、神・仏がついているの、代理であるのと、その教団の教祖を偉大なる聖なる存在に祭り上げ、その教団の教祖のPRに力こぶを入れているのである。

不幸、不運を振り払おうとワラでもつかみたいと思っている人たちは、こうした宣伝のワナにかかる。その内容は、いかにも心霊科学に基づき、神霊主義の目的に似ているが、単に教団のPRにとって都合の良いところを受け売りして、いかにも学問に基づいているから間違えないもののように見せかけている。しかし、肝心な、ここに原理があるというところについては、その教義に、あるいは教祖の偉さでごまかしているのである。そして、前述の不幸・不運の者を信者に取り込み、自分の教団の「信仰」にもって行かせようとしている。ところが、本物の心霊科学、すなわち神霊主義の説いている人生の指導原理の中に、「それぞれの人間には先天的に守護霊が働いており、この守護霊への道を歩み進める時、上のような講習を受けなくても、除霊や浄霊をしなくとも、不幸や不運をもたらす邪霊、悪霊、未発達霊は働くことはできない」ことになる。すなわち、悪邪霊や未発達霊は、霊の存在するかぎりいつまでも未発達、邪・悪霊のままではなく、自らに具わっている向上性を発揮するために、現在はとりあえず下積みの状況、いわば陰に没していても、各々の霊は一人の例外もなく、守護霊が陰に陽に指導してくれているということである。

このような歩みは、とても人間の能力では指導したりその他のすべもない。人間は、生を地上にうけている間は守護霊によって十分守られている。しかし帰幽後は、人霊である守護霊によって正しい向上への道を歩ませようとしても、何かと能力に欠けているところもある、そこで死後の世界での霊的指導はもはや人霊以上の力のある、人間系の神（第二義的の神である指導神）が当たらなくてはならない。したがって死後は守護霊に代わって指導神がこれに当たっている。

こうしたことだけを考えてみても判るように、地上の人間、それが聖者であろうと救世主であろうと、言葉では何とでもその偉大さを表現できようが、実際にはとても容易なことではない。したがって、われわれは人生を歩むにあたり、心霊科学の普及と修得への努力の必要性を力説しているのである。

ましてや、霊の分類上、いわゆる悪霊、邪霊の守護霊と言った表現が用いられているが、未発達な霊から最も高級の霊（神）にいたるまで全ての霊魂との関係、交流、感応、交霊はすべて本人の波長によると説いている。

したがって、この心の波長によるとはいえ、果たして、それらの教団において、書き物によって、また口によって行われる除霊、浄霊がはたして心霊科学の法則すなわち宇宙の法則に適ったものといえるものなのかどうか、皆さんに考えてもらいたい。

前述したように、いくら文字で、あるいは口で表現したところで、正しい結果がもたらされなければ「虚」であり「無」である。まして、どんな形式によって行事を行ったところで、それは単にそれだけの、文字通り形式的にしか過ぎない。その実を伴わせるところに、その原理がある。それを教えているのが心霊科学である。

すなわち、あくまでも科学的態度を保持し、これをもって結論づける。これらの心霊現象といえるすべてに対し、しかも、そうしたことができるという霊感霊媒者それらの行動とその真否を明らかにするために審神者制度があり、七か条の条件（註）がその資格を得るためには不可欠なものである。

除霊・浄霊こそは、正しい審神者によってのみ判定できるのである。それらの教団の制度下にそれがあるとはきかない。〈ある〉といっても、それは単なる形式のみであると言える。

（註）審神者の資格を得る条件

- ① 心霊上の学識と経験
- ② 正しい判断力
- ③ 不動の信念
- ④ 高潔な人格
- ⑤ 深い同情心
- ⑥ いかなる物事にも動じない心
- ⑦ 物事の本体を見抜く看破力